



Title	Matthew Arnoldの人生観
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外国語大学学報. 1970, 22, p. 159-168
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Matthew Arnold の人生観

上 山 政 義

The purpose of this essay is to think about Matthew Arnold's view of life and make it clear chiefly through his poem "The Future", which is tentatively translated into Japanese in prose by the writer of the essay himself.

Matthew Arnold (1822-88) の人生観或は世界観は、彼の散文における代表作である "Essays in Criticism" や "Culture and Anarchy" などの論説の中でも、随所に表明されているのであるが、最も簡潔かつ強力に具現されているのは、彼の詩の中であると言っても過言ではないであろう。巷間すでに周知されている如く、彼の作詩の基本的態度は、単なる修辞の巧緻のみに依存することを極力避けて、真に人生の在り方を探究するという厳粛な主題に着眼点をおくことである。今更あらためて言うまでもなく、このことは「詩は人生の批評でなければならない」という彼の根本理念に基づいている。従って、彼の詩に実際に表明された語句、および詩の行間に滲み出ている思想や感情を通じて、彼の人生観、世界観を捉えてその本質を分析し解明することを試みるのは、彼のエッセイを検討することに劣らず意義深い企てであると言い得るのではないだろうか。

次に彼の包括的な人生観を赤裸々に示すものとして、彼の詩集に含まれている "The Future" を取り上げ論評を加えることにしたい。先づその詩の全貌を実際に示してみよう。なお、各節末に付した試訳は散文訳である。本稿では詩としての修辞学的鑑賞を目的としていないので、敢えて詩形をとった和訳をしなかったことを諒とされたい。

The Future

(Tinker & Lowry 編: The Poetical Works of Matthew Arnold pp. 251-4)

A wanderer is man from his birth.
He was born in a ship
On the breast of the river of Time;
Brimming with wonder and joy
He spreads out his arms to the light,
Rivets his gaze on the banks of the stream.

人間は生まれながらに放浪者である。
彼は時なる川の水面に浮ぶ船の中で
生を享けた。
驚異と歓喜とに溢れて
彼は光に向って、両腕を拡げ、
流れの堤に視線を注ぐ。

As what he sees is, so have his thoughts been.

Whether he wakes,
Where the snowy mountainous pass,
Echoing the screams of the eagles,
Hems in its gorges the bed.
Of the new-born clear-flowing stream;
Whether he first sees light
Where the river in gleaming rings
Sluggishly winds through the plain;
Whether in sound of the swallowing sea —
As is the world on the banks,
So is the mind of the man.

彼の目に映るものが存在するように、彼の思想は存在してきた。
鷲の雄叫びをこだまする雪深い山の小道が、
その溪谷で新生の清い流れの川床をふちどるところで、
彼が目覚めようとも、
光り輝く輪を描いて、
その川が緩漫に平原を曲りくねって流れるところで、
彼が初めて光を見ようとも、
巻きこむ海の音の聞えるところで生まれようとも、 —
世界が岸のほとりにある如く、
人間の心は存在するのである。

Vainly does each, as he glides,
Fable and dream
Of the lands which the river of Time
Had left ere he woke on its breast
Or shall reach when his eyes have been closed.
Only the tract where he sails
He wots of; only the thoughts
Raised by the objects he passes, are his.

各人は川面を滑りながら、
時という川が彼がその水面で目をさます前に去っていた国、
或は彼の目が閉じられたときに到着する国について、
空しく作り話をしたり、夢をしたりする。
彼は自分が航行する地域だけしか知らない。

彼が通りすぎる対象物によってひき起される思考だけが、
彼のものなのだ。

Who can see the green earth any more
As she was by the source of Time?
Who imagines her fields as they lay
In the sunshine, unworn by the plough?
Who thinks as they thought,
The tribes who then roamed on her breast,
Her vigorous, primitive sons?

時の源のそばにあった如くに、
緑の大地を誰がもう見ることができようか。
鋤で耕されずに日向に横たわっていたときの畑を
誰が想像するであろうか。
その頃大地の懷を彷徨した大地の
活気の溢れた原始的な息子である部族たちが考えたように、
誰が考えるであろうか。

What girl
Now reads in her bosom as clear
As Rebekah read, when she sate
At eve by the palm-shaded well?
Who guards in her breast
As deep, as pellucid a spring
Of feeling, as tranquil, as sure?

如何なる乙女が夕暮ときに、
しゅろの木蔭の井戸端に坐ったとき、
レベッカが読んだと同じくらいにはっきりと、
今大地の胸の中で自然を読みとることができようか。
誰が大地の胸の中で、
レベッカと同じくらいに、深くて澄んでおり、
又静かなそして確かな感情の
泉を守るであろうか。

What bard,
At the height of his vision, can deem

Of God, of the world, of the soul,
With a plainness as near,
As flashing as Moses felt
When he lay in the night by his flock
On the starlit Arabian waste?
Can rise and obey
The beck of Spirit like him?

如何なる吟遊詩人が、
幻想の高まったときに
モーゼが星に照らされたアラビアの荒野で
夜半に羊の群れのそばに横たわったときに、
感じたと同じくらい近くて、ひらめく素朴さで、
神、世界、霊魂について考えることができるのか。
彼のように精霊の指図に従うために
立上ることができるのか。

This tract which the river of Time
Now flows through with us, is the plain.
Gone is the calm of its earlier shore.
Border'd by cities and hoarse
With a thousand cries is its stream.
And we on its breast, our minds
Are confused as the cries which we hear,
Changing and shot as the sights we see.

時なる川が今我々とともに
貫流しているこの地域は平原である。
そのもっと以前の静寂はなくなった。
その流れは都市によって接せられ、
多くの叫び声で耳ざわりである。
そして我々はその胸にあって、
我々の心は我々が聞く叫びのように混乱し、
我々が見る光景のように変化し影響される。

And we say that repose has fled
For ever the course of the river of Time.
That cities will crowd to its edge

In a blacker, incessanter line;
That the din will be more on its banks,
Denser the trade on its stream,
Flatter the plain where it flows,
Fiercer the sun overhead,
That never will those on its breast
See an ennobling sight,
Drink of the feeling of quiet again.

そして我々は安らぎは永遠に
時なる川の進路から逃げ去ったと言う。
都市はさらに黒くて不断の列をなして
そのふちに群がるであろうと言う。
騒音はその堤でさらに多くなり、
その流れのほとりで商売がもっと繁くなり、
それが流れる平原はさらに平坦になり、
頭上の太陽の輝きはもっと激しくなるだろうと言う。
その胸にいる人々は崇高ならしめる光景を
決して見ないであろうし、
再び静寂の感情を飲みはしないであろうと言う。

But what was before us we know not,
And we know not what shall succeed.

しかし、我々は以前にあったことを知らないし、
以後に何がつづいて起るかも知らないのである。

Haply, the river of Time —
As it grows, as the towns on its marge
Fling their wavering lights
On a wider, statelier stream —
May acquire, if not the calm
Of its early mountainous shore,
Yet a solem peace of its own.

時なる川は成長するにつれて、
そのほとりにある町が
より広く堂々とした流れの上に、ゆらめく光を投げかけるにつれて、
恐らくそれは昔の山の多い岸の静けさを得なくとも

それ自らの荘厳な平和を得るかもしれない。

And the width of the waters, hush
Of the grey expanse where he floats,
Freshening its current and spotted with foam
As it draws to the Ocean, may strike
Peace to the soul of the man on its breast —
As the pale waste widens around him,
As the banks fade dimmer away,
As the stars come out, and the night-wind
Brings up the stream
Murmurs and scents of the infinite sea.

そしてそれが大洋へ近づくにつれて、
その流れを強くし、泡が点在して、
彼が浮んでいる灰色の水の広がり静けさと、
川の広さとは、その胸にいる人の魂に
平和を打ちこむかもしれない —
青白い広がりや彼のまわりで拡大し、
堤が次第にぼんやりと消えて行き、
星が現われ夜風が川を上って
無限の海のざわめきと香気をもたらすときに。

さて、この詩についての論述を進める前に、Tinker および Lowry 両氏のこの詩についての解説の一部を次に紹介することにする。

(The Poetry of Matthew Arnold — A Commentary [p.288])

From 1852 to 1869 'The Future' had the place of honour as the final poem in the volume; and it has retained the position permanently in the group of Lyric Poems. In 1853 and 1854 it was furnished with prefatory lines:

For Nature has long kept this inn, the Earth,
And many a guest hath she therein received —

即ち、1852年から1869年に亘る17年間は、この詩が詩集全体の巻末を飾る詩としての榮譽を与えられていたことが我々の注目を惹くのである。あらゆる物事において、最初と最後とがとくに重要視されるべきであることは言を俟たぬであろう。Arnold の詩集においても、開巻第1頁を飾る詩である“Quiet Work”は彼の人生観の一端を簡潔かつ如実に示したものとして、識者の間で洛陽の紙価を高めてきたのである。このことは Arnold が冒頭に掲げる詩の選択に十分の配慮を加えたことを示す理由の一つを裏づけるものと思われる。それと同時にこのことは彼が詩集の

最後を飾る詩の選択にも慎重な配慮をしたことをも暗示するのではないであろうか。従って、「未来について」と題するこの詩が、人間生活の将来について予言し暗示するものとして、また人生行路を旅するときの指針として、全巻の総括的な締めくくりを与える役割を演じることを Arnold が期待したと解することも可能であろうと思われる。なお、付言すれば、この詩がその後において、巻末の地位をはずされて、単に Lyric Poems の終りに位置するに到ったのは、全詩の分類の都合によるものであり、そのことにあまり拘わる必要はないであろうし、そのために“The Future”の価値がいささかでも減少するものではないであろう。

次に1853年と1854年において、この詩に付せられていた prefatory lines を一見すると、「自然は大地というこの旅籠を長い間営んできて、そこで数多くの客を迎えてきたのである。」と書かれている。この2行および“The Future”の詩全体を通読すれば、我が国の俳人松尾芭蕉の代表作の一つである「奥の細道」の巻頭の部分と一脈相通じる個所があることに気づくであろう。今具体的にその一節を次に掲げることにする。

「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人也。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。」

なお、この文章は李太白の「夫天地へ者万物之逆旅ニシテ光陰へ者百代の過客ナリ。」をよりどころとしているのであるが、松尾芭蕉および李太白は何れも天地を万物を宿す宿舎と考えて、月日の経過を旅人の漂泊にたとえているわけである。しかし、さらに進んで、両者とも、人間のはかない生涯を悠久の天地と比較して、短期間にこの大地を旅する旅人とみなす見解を念頭においていたものと考えても差支えないであろう。

ところで、このような人生観は、Arnold の前掲の2行の prefatory lines および“The Future”の全体に亘って脈々として流れているのである。即ち、Arnold は悠久の大自然を旅籠とみなし、太古以来無数の人間という旅人を迎えたとうたっている。このように、奇しくも、中国、日本および英国の詩人または俳人が同様な人生観を吐露していることが我々の注目を惹くのである。なおこの2行の prefatory lines が Arnold の創作であって、他の詩人からの引用でないことは、次の文が Yale M S. に見られることから明らかである。

Nature has long since kept this inn, the Earth & seen so many successive floods of guests with their fashions & ridiculousness that no swagger of any new comer can impose on her.

(Tinker & Lowry: The Poetry of Matthew Arnold—A Commentary [p.200])

さて、次に“The Future”の内容について逐次検討を加えて行くことにする。先づ第1節を見てみよう。第1行目の A wanderer is man from his birth. は人の世の定めなき運命を僅か一行で明白かつ適確に示したものである。正しく簡にして要を得た表現と言うべきであろう。さらに、次の行においては、人間の生涯を河川を航行する乗客にたとえている。これは、世の中という巨大な潮流に呑みこまれると、個人の力の到底及ばない神の摂理の支配に我々が身を委ねなければ

ならないことを説いているわけである。なお、the River of Timeという語句は、次の引用文の示す如くに、ヘーゲルの image であり、絶対的な象徴である。実にこの表現は読者をして肅然襟を正さしめる要素を含んでいる。

The River of Time, a continuous and winding stream, flowing from the pattern of the past into the far shape of things to come, is, one supposes, a partly Hegelian image, with that accompanying touch of austerity which belongs to absolute symbols.

(Tinker & Lowry: The Poetry of Matthew Arnold—A Commentary [p.201])

第3節においては、人生を送る過程において、誰しも来し方を回顧し、行く末について思いを馳せる時がしばしば生じるのであるが、その回想や思考の範囲が、自分の経験の内容に自ら限定されていることを述べている。換言すれば、人間の知識は個人個人が如何に自己のそれを誇大視しようとも、実際は狭い範囲のものでしかないことを説き、我々に謙虚な気持ちで真理を探究すべきことを教えている。この教訓を身に体して学問の道に精進してこそ、始めて真理の扉が開かれることを吾人は銘記せねばならない。第5節においては、喧騒を極めていて、混乱した世の中にあっても、自然を愛し、自然に親しみ、清純な感情の泉を常に我々が心の奥底に把持していなければならないことをうたっているものと思われる。目先の私利私慾のみに目が眩んでいては、真に人間らしい歩み続けることは不可能だからである。大自然の限りない恩恵に感謝しつつ、心ゆくまでその崇高さ、美しさを身をもって味わってこそ、この世に生を享けた感激が一入深い感謝を伴って感じられる。このような体験こそ意義ある生活を送るための原動力となるものである。第6節においては、我々が神、世界、霊魂などを考察するに当って、flashing plainness「ひらめく素朴さ」が必要であると述べている。しかも、その「素朴さ」は太古において星明りの夜にモーゼが感じたのと同じ性質のものでなければならぬと説いている。神の声に耳を傾け、精霊の指図に従って身を処することができるためには、汚れない太古そのままの質朴な心境になって思索し、行動することが肝要なのである。

第7節においては、農村が次第に疲弊し、都会が益々隆昌に赴むいている状況に触れている。今日大都会では精神文化の進歩、向上が物質文明の発展に伴わない憾みがあることを我々は日頃痛感している。十九世紀後半においてすら、Arnoldはこのことを歎いたのであるから、もし彼が現代の大都会の様相を眺めれば、如何なる感慨を催すかは、もはや思い半ばを過ぎるであろう。到る処で騒音を含む各種の公害が、我々の日常生活をどのように脅かしているかは、我々が日々身をもって体験をしている事柄であるが、第十九世紀後半において既にArnoldがそのことに悩んでいたのである。詩人らしい未来への鋭敏な直感と洞察を伺い知ることができると言えよう。さらに、大都会では単に騒音が耳ざわりだけでなく、視覚に訴える不純物も余りに多く氾濫し、目と耳による神経の疲労、消耗は言語に絶するものがあることは周知の通りである。第8節は第7節の内容を一段と敷衍して、人間の生活から安息が次第に姿を消してしまっていて、人々の純朴な精神を高揚させ、静寂枯淡の境地に入らせる環境が世の中から消滅して行くであろうと述べ

ている。今日世界の状況に思いを馳せるとき、Arnoldの予言がいみじくも的中していることに驚嘆の念を禁じ得ないであろう。心静かに内省する時間を持つことなく、馬車馬の如く東奔西走しては、到達点が所期の目標から遠くかけはなれているという結果を招来しがちである。

さて、第9節は僅か2行から成り、しかもその内容は一見至極平凡、陳腐なことを表現しているに過ぎないと思われるであろうが、彼が我々には過去および将来のことは分らないと述べていることは、結局我々が一日一日を全力を尽して生き抜くべきことを説いているのではないであろうか。既往にとらわれることなく、直面している現在の対象に向って全てのエネルギーを注いで活動することが、要するに最良の結果を生み出す最大の要因であることを教えているのである。かくしてこそ、人間は悔なき充実した生涯を送れるのである。

ところで、Arnoldの詩は次第に終りに近づき第10節、即ち終りから第2番目の節へと進むのである。この第10節においては、世の中の流れに対して、徒らにただ慨嘆することから、更に一歩を進めて、時という川が大洋へ接近するにつれて、それ自体のsolemn peace「荘厳な平和」を得る可能性があることを暗示している。斯くの如き荘厳な平和とは、どんな本質と属性をもつものか、そして如何にすればそれを人間が獲得できるかについては、Arnoldはこの詩の中では触れていない。それは飽くまでも単なる抽象概念としてのみ与えられているに過ぎない。それ故に、その解明は我々の臆測に依る外はないのである。しかし、我々はArnoldの説く平和がsolemnという修飾語によって形容されていることに注目しなければならないと思われる。物質文明の繁栄に酔い、安逸を漫然と貪ぶ人達が享樂するが如き平和は、Arnoldが理想に描く平和とは程遠いものであることは火を見るよりも明らかである。彼の心から希求する荘厳な平和とは、どこまでも崇高な精神文化を基盤とするものであり、謙虚で素朴な心情をもつ人々によってのみ培われるべきものであろう。ここでとくに我々の注目を惹くのは、この節の終わりの3行であって「昔の山の多い岸の静けさを得ずとも、それ自身の荘厳な平和を得るかもしれない」という点である。時代の推移変遷につれて世相が刻々と変化して行くことは避け難いものであり、都会の近郊の開発が進むことは勿論、従来静かで牧歌的な田園地帯であったところまでも、都会的な喧騒が日を追うて波及することは不可避的な趨勢であろう。何人といえどもそれを阻止することはできない。しかしそれ故に必然的に人々の心の平和、静穏が乱されるとは限らず、また乱されてはならないのであって、要は物質文明の進歩に伴って、精神文化もそれに対応する向上をなすことが望まれるわけである。すなわち、物質本位の物の考え方を脱却し止揚して、人間の本来あるべき相を探究する姿勢を我々が常に堅持することが大切なのである。

さて、本詩は愈々最終の節である第11節へと進もうとしている。時なる川は流れ流れて、遂に大洋間近となり、その川面に浮ぶ船上の客である人の目にも大海原の青さが目に沁みってくる。川の流れを人生行路に譬えれば、全ての人にいつかは訪れる旅路の終焉が愈々目睫の間に迫ったのである。やがて時刻は恰も星が輝き、微風のそよぐ夜となる。正しくこの時に、灰色の水の広がり、川の静寂と、川の広さとが、人の心に平和を打込むという。このような情景に直面するならば、

何人といえども心の緊きしまるのを覚えずにおれないであろう。有為転変常なき人生の諸相は、人間の心の奥底にそぞろ無常の感を湧かせるのではあるが、宇宙の永劫の潮流は、心ある人々の魂に平和を与える方向へと動いていると考えるべきである。このような考え方こそ神の摂理が存在し人間の世界を厳然と支配しているという信念に基づくものである。各人が魂の平和を得ることが結局人類全体の幸福への道につながる唯一の方策であるというのが Arnold の脳裡を去来した根本理念であると言ってもよいであろう。

終わりに、本稿を結ぶに際して、The Note-books of Matthew Arnold に引用された一節を紹介しておきたい。(The Note-books of Matthew Arnold edited by Haward Foster Lowry, Karl Young and Walds Hilary Dunn: Oxford University Press 1952)

It cannot but weigh heavily on a tender conscience to be accused in a practical nation like ours, of keeping aloof from the work and life of so many care-threatened men, and of merely toying with poetry and literature. So it is with no little satisfaction that I find myself in the position of one who has made a contribution in and of the practical necessities of our times. The great thing, it will be observed, is to find our best self. (Matthew Arnold: Culture and Anarchy. pp.89-90)

すなわち、Arnold の所論によれば、処生の肝要な事柄は、我々の best self を見出すことなのである。換言すれば、精神の修錬と人格の陶冶に最善の努力を尽して、自己の持つ天賦の資質を最高度に発揮することが大切なのである。斯くすれば、我々はそれぞれの時代の要請に即応した、世の中への貢献を果すことが可能なのであり、各人の存在理由が有意義に、かつ明白に示されるわけである。